

## 地域特性を活かした持続可能な農村整備

系長浩司（日本大学生物資源科学部 教授）

### はじめに

21世紀に至り、20世紀型の地球環境、自然環境に対して多大な負荷を与え続ける生活、生産様式の転換が迫られている。その解決の方向として、持続、循環、エコロジーがキーワードとなってきた。環境共生的で、持続的で、循環型の地域形成、社会形成の必要性が語られて久しい。自然の仕組みを理解し、個々の地域の自然環境、歴史・文化を継承しながら、未長く、次の世代も十分に幸せに暮らせるための環境づくりが重要となっている。

自然と共に暮らし、自然から恵みの糧を得てきた農村の暮らしの魅力を生かした、持続可能な農村空間構築が求められている。そして、それは、古い伝統的な知恵と、新しい知恵、古い伝統的な暮らし人と環境配慮型の新しい暮らし人との協働による環境づくりである。

農の意味を再度考え、農に支えられた自立・自律・循環・持続・共同性のある暮らしのための農村環境づくり、個々の農村環境の特徴を活かしたエコロジカルな環境づくりの展望を考える。

### 1. 21世紀の地球人の課題

21世紀の我々地球人の課題は、環境、食料、水、エネルギー、コミュニティである。これら、人間が生きて行く上で必要不可欠のものをどう持続させることができるのか。その持続のためには、20世紀型の作り 使用し 廃棄するという線形の流れではない、「つながる」という循環系のシステム開発が必要となる。そのシステムは自然から学ぶことができる。食物連鎖から構成されるエコシステム(生態系)か

ら学ぶデザインである。この地球的課題を個々の地域に暮らす人達が、その地域で共同の力で解決していくことである。個人的、地域的、共同的な解決をローカルレベルで着実に進めることである。

地球環境サミットで世界的に合意した、「環境、経済、社会」の三位一体的な持続性を地域(ローカル)で実現していくプランと行動がより重要となっている。それは農村環境整備においても同様である。

### 2. 「ないものねだり」から「あるもの探しと活かし」での地域づくり

20世紀型のスピード重視型、大量生産、大量消費型のライフスタイルが見直され、「スローライフ」、じっくりと時間をかけて、地域に根ざした暮らしのあり方が話題となっている。「地産地消」という地域でできたものを地域で消費し、廃棄物も地域で循環利用するという理念にも通じるものである。そして、その実行主体は地域に暮らす住民であり、地域社会である。地域で自律・自立し、地域のことは地域で決めて地域で生きようという姿勢である。

その実現のためには、遠い地域の資源を持ち込むのではなく、地域にある資源を発見し、それを有効につなぎ活用することである。全国各地で、「地域の宝もの探し」、「地元学」の運動が始まっている。地域の魅力をみんなで発見し、それを生かした手作り型の地域づくりである。

### 3. バイオリージョン(生命地域)と流域

我々が生産し、生活している環境は多重な環境で構成されている。我々が住み、働き、憩う環境は、地形、土壌、水系、

植物、動物で構成される環境である。その環境の上に、歴史的に人間社会が作られ、歴史、文化の人文的歴史文化が形成されてきた。このような総合的で重層的な地域をバイオリージョンという。川を中心とした流域の環境が代表的なバイオリージョンの環境である。

米国での環境運動の一つに、バイオリージョナリズムがある。生命地域主義と訳せる。行政的な枠を越えて、生物・生命が共存・共生しているつながりの環境を保全・育成するために、流域地域の住民、上流と下流の住民と一緒に環境保全・育成活動を考えていく運動である。

この種の活動は、日本では、「森は海の恋人」として近年、海の民と山の民の流域を介した連携運動として進められてきている。

豊かな海の環境を育てるためには、健全な森の育成が必要である。下流部の漁民・住民が上流部の森林育成・保全に努力する流域的運動である。豊かな森を育てるためには、健全な海の環境とそのつながりとしての健全な河川環境が必要となっている。また、鮭の遡上に象徴されるように、海の栄養分が陸地、山に運ばれ、山の生態系の再生に寄与しているこ

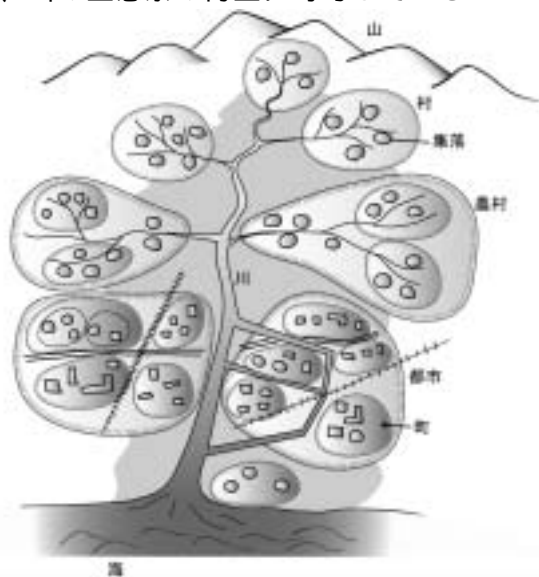


図1 バイオリージョンの模式図

とも明らかになってきている。山と海は、河川を介して密接な生態系的な交流がある。その中間的領域にある農村環境が、より流域生態系に対して、汚染や環境破壊につながらないようにすることも重要となる。環境配慮型の農業、農村整備が重要となっている。

#### 4. 農村環境のもつ多様な価値と機能

農村環境は多様な価値と機能を持つ空間である。人間が長い年月をかけて、共同で自然に働きかけ創造してきた「自然と人の共生関係」の環境である。このような農村環境の持つ意義と機能は下記のように整理できる。

人間の自然への働きかけの濃淡により、より野生性の高い自然環境と、人間が働きかけた結果として生息可能な生物（農業生物）等で構成される生物多様性の環境

人間が生きていく上で必要な食料を持続的に生産する場

都市の水瓶としての水源地域

人間が自然を生かし、自然を活用して持続的に構築してきたヒューマン・エコシステムとしての環境

長い歴史の中で継承された共同的な暮らしの文化

景観・憩い・アメニティ

自然との向き合い自然を感じられる環境（癒しの環境）、ツーリズムの場

自然との関係を体感的に学べる場、食育教育の場

これらの農村環境の多面的な機能を農村に住む住民だけでなく、農村を訪れる都市住民との協働により実現することが求められている。

#### 5. 農村集落の景観的魅力を生かす

農村環境の拠点是人々の居住する集落にある。[里山 - 農家屋敷 - 畑地 - 水田 - 河川] で典型的に構成される里地里山の集落

環境は、日本人が持続的に創造維持してきた自然と人間の安定的に共生環境といえる。二次自然としての里山、人間に手入れが入ってはじめて生きつづけられる「農業生物」の存在、四季折々の彩りと変化のある景観等多様な魅力を農村集落は持っている。そして、この伝統的な農村景観は、集落住民の「共同作業」によって支えられてきた文化景観でもある。

農村の景観は今出来たものではない。長い年月に渡る先人達の努力によって、作られてきたものである。そこは、生活と生産の舞台であり、長い年輪をその固有の地に人間が刻んでできた軌跡でもある。

農村集落は多様な地形の上に、多様な形態で立地してきた。谷合の丘陵部、谷合の低地部、台地部、山裾部、扇状地部、河川段丘、河川低地部等に区分できる。散居、散在、集居（塊状、列状）に区分できる。

山裾集落は、豊かな自然を比較的容易に獲得できる場であった。山に降った雨がじっくりと浸透し、それが地下水となって山裾から湧き水として湧いてくる。背後の森林には、数多くの山の幸がある。それを採取して糧を得る。寒い北風を防いでくれる。前面には、水をたたえた耕地が広がる。この形態は、中国の「風水」に代表されるように、ふところに抱かれた、居ごこちのよい空間である。背後の山と前面の水の地であり、落ち着いた居住地を形成する。そこに、小集団で居を構え、空間をしつらえてきたのが、山裾集落である。

その後、前面の扇状地、野に向かって居住地は拡大していった。その形態が、散居集落の景観となる。かつての自分達の生活を守ってくれる自然の山や、水がそのまま、豊富に手に入れることはできない。自分達で、用意しなければならない。その結果が散居集落の屋敷林や平地林の景観であり、集落の中を編目状に行き交う水路網である。散居景観の屋敷

林の孤島的な緑の島の景観は、自然との厳しい付き合いの中で獲得した人間のビオトープ（生態学での野性生物棲息空間の意味）の景観でもある。

また、歴史的な街なみや村なみ等の人工的な建造物が醸し出す景観がある。農村景観は、自然 二次的自然 人工物から構成される。二次的自然とは水田や里山に代表されるような自然である。特に日本の場合には縄文時代後期から居住地の周囲の自然に対して長期的に働きかけ、その結果として自然遷移のままの原生自然を活用してきたのではなく、自然遷移に向かう過程に対して常に定期的に攪乱（人間の管理作業）していくことで、人間にとって有用な二次的自然をつくってきた。

それが里山であり、水田である。その結果として、水田や里山をすみかとする生き物（管理された里山に生息できるカタクリ、福寿草、ギフチョウ、春の代かきされた水田で産卵するカエル等、これらを農業生物という場合もある）が生息できてきた。童謡にある「うさぎこいしかのやま、こぶなつりしかのかわ」の農村環境は人間が自然とともに作り上げた環境である。その上に、あるいはそれらの環境に囲まれた住宅等の建物が存在している。このような重層した環境の構造が農村景観にあり、都市にはない魅力である。



写真 1 伝統的な農村集落風景（京都美山町）

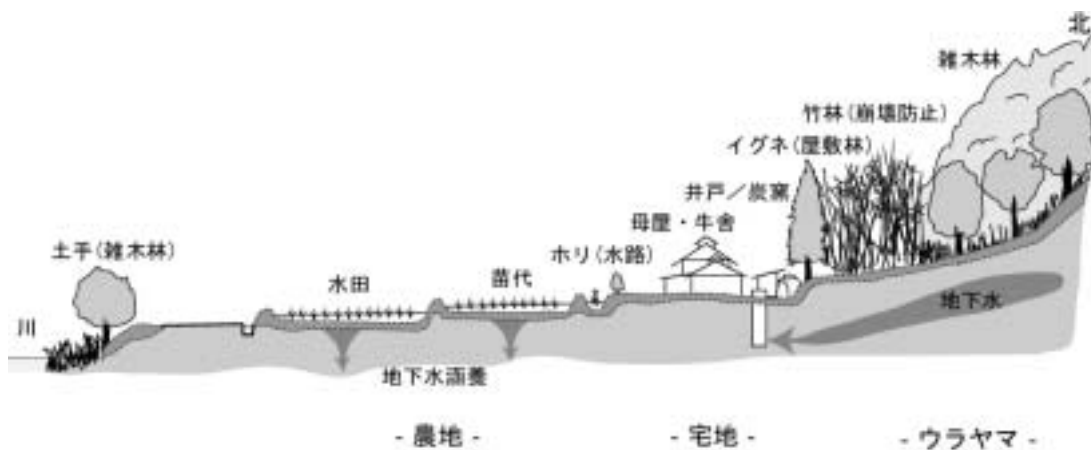


図2 農村集落の断面構成、[里山-居住地-畑地-水田-河川]の空間構成

## 6. 交流・学習型の農村環境づくり/ グリーンツーリズム・エコミュージアム・エコ ツーリズム

農村の持つ、多様な機能、景観的魅力、自然や農業に触れることは、都市住民にとって魅力的な休暇、旅行の過ごし方となる。一方で、農村地域住民にとっても、地域の地形・環境・歴史・産業文化・生活文化を見直し、地域環境の保全・再生、活性化の方法としても有効となる。

農業的体験や農家の伝統的な暮らしを滞在して楽しむ「グリーンツーリズム」や、農村地域にある、農業文化遺産、歴史文化遺産、暮らし遺産等をフィールド博物館的に位置づけ、しっかりとしたガイドによる文化資産案内による「エコミュージアム」運動が近年、農村地域で活発化している。

地域住民が地域の資源を生きた形で保全・活用し、そこを訪れる都市住民はその力所を周遊しながら農村文化を学び、楽しんでもらうというものである。

更に、河川や里山、奥山での自然体験、自然観察という野生性の高い自然環境の体験等の色彩が強くなると「エコツーリズム」に発展してくる。

これらの学習型で、地域特性を生かした魅力的な農村環境づくりのポイントは、農村らしい景観の保全・再生、伝統的な暮らしの保全・

健全な生態系の保全・再生である。ただ、これらの農村環境が地元住民だけで維持できない場合には、都市住民の参加を得て、協働により、その環境保全・再生に取り組む事例も多くなっている。農村環境・景観の資源は、単にそこに居住する農村住民達だけのものではなく、都市住民を含めて国民的文化・環境資産として維持していくという考え方である。

また、停年退職者が今後多く出てくる社会環境にある日本では、農村地域の自然環境や農業環境の維持のためにも、また、健全で、アメニティ性の高い暮らしの場として農村居住を促進させる施策や運動が起きてきている。「NPO法人ふるさと回帰支援センター」のような動きが活発化しており、今後の農村環境づくりの大きな刺激となっている。



写真2 都市住民参加での保全活用されている棚田（千葉県鴨川市大山千枚田）



図3 神奈川県丹沢大山地域における都市農村交流を介した地域再生のテーマ(神奈川県丹沢大山総合調査での筆者の提案図面) / 2004年度調査中

## 8. 住民主体の計画的な農村環境づくり

地域特性を一番知っているのは、そこに暮らす人達である。その地域住民を主体として、農村環境づくりを進めることが重要となる。住民参加・参画により、行政との協働による環境づくりである。筆者は、長年、農村住民、行政との理念で農村環境づくりを進めている。その事例を幾つか紹介する。

### 住民主体の土地利用計画づくり

農村環境整備のベースとなる土地利用計画を地区住民と一緒に作成し、それに基づき、景観保全、施設づくり、環境保全活動等を進める方法である。人口9000人の山形県飯豊町では、旧村地区単位のコミュニティ単位で地域振興会が結成され、各地区別の土地利用計画を作成し、住宅開発予定地、農地保全、環境農地、里山保全、レクリエーション地等を明確している。



写真3 飯豊町の伝統的散居集落景観

### スローライフの暮らしづくり

福島県飯舘村は人口6600人程度の村であり、第4次総合計画策定(平成6年/テーマは「クオリティライフ」)時から村内の20地区(集落)別で、住民主体による地区別計画を作成し、10年間で各地区1000万円の活動費を援助し、地区住民主体の地域環境づくりを進めてきてい



後は水田に至る農業水路を、集落の一角に共同で取得した農地に引き込み、子ども達、老人達のための親水公園として整備した。計画の段階から住民主体で進め、その後の施工・管理に関しても主体に集落の共同事業として進めた。農村的環境を生かし、水、多様な木々、虫観賞、東屋、広場等が配置される自然豊かな多面的機能の公園として整備され、活用されている。



写真6 田中集落住民との公園計画WS



写真7 整備された田中集落親水公園

## 9. エコビレッジづくり

温暖化、自然環境の破壊、生物多様性の危機等、多様な地球環境的課題は益々増加してきている。このような中で、生態系に配慮し、持続可能で、自給自足性の高い農村居住地づくりとして、近年世界的に、北欧を中心として「エコビレッジ」（エコロジカルな村づくり）運動が始まっている。筆者も世界のエコビレッジ運動の研究を10年来進めている。そこでは、環境への

配慮、自然共生型の建物（エコ建築）、自給持続性の向上、ヒューマン・スケールの大きさ、居住者共同のビジョンを持つ等の理念・原理が提唱されている。



写真8 デンマークのエコビレッジ

日本でも日本的気候風土にあった、環境に対する負荷の少ない環境共生型住宅づくりが求められている。全国各地で地域の木材を活用した地産地消型の家造りがテーマとなっており、近年、多くの地域で風土密着型の家造りが、官民協働で個々見られてきており、環境共生型の農村住宅地づくりも大きなテーマとなっている。



写真8 鹿児島県屋久島の環境共生型の町営住宅（設計：岩村和夫）

一方、日本には13.5万の既存集落があり、伝統的な地産地消的暮らし、自給自足的暮らしの伝統もある。地球環境に配慮した自給持続性の高い暮らし、環境共生型の暮らしを、これらの既存集落がめざし、日本型のエコビレッジづくりが近々の課

題となっている。筆者は、日本の特徴である里山を生かした「里山エコビレッジ」構想を描いて、幾つかの農村地域での関わりを始め、提案と具体的な実践活動を、農村環境の再生をテーマとして始めている。

### 自然エネルギーをテーマとしたエコビレッジ構想

先に紹介した住民参加での土地利用計画でのまちづくりを進めて来ている飯豊町での次のテーマは、「環境と経済の循環したまちづくり」であり、森林資源を活用し、木質バイオマス資源を自給し、石油依存の農村社会から、自然エネルギー自給型の農村、エコビレッジ構想を住民、行政と一緒に進めている。水源地域であり、ダム上流部の中津川地区には、山形県の「源流の森」という自然環境、農村環境の学習拠点施設も整備されている。それらの施設を活用し、元々も地元住民主体でのツーリズム産業との連携を図る。エコツーリズム的視点を入れ、都市住民の自然環境を学ぶ場も含めた「中津川エコビレッジ構想」を提案し、木質ペレットエネルギー生産プラン

トの実現化に向けた活動をしている。



写真9 中津川地区の林間ホテル



写真10 ペレットストーブ普及活動

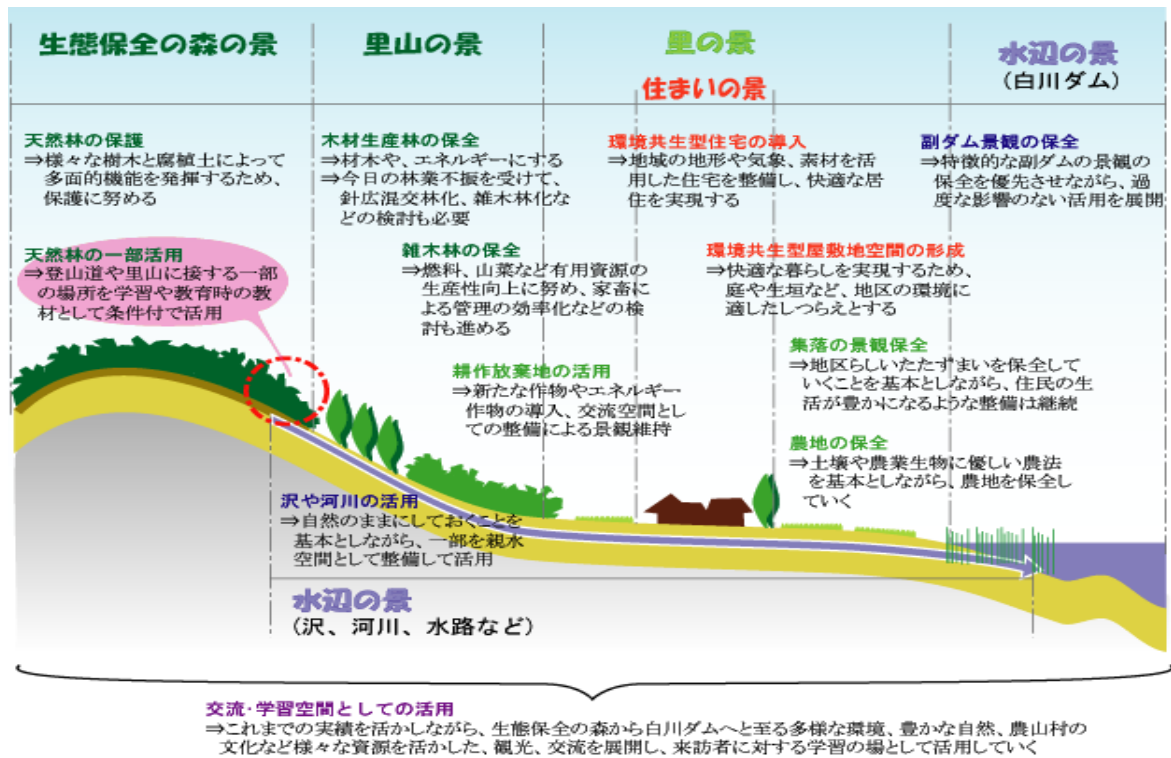


図4 飯豊町中津川地区のエコビレッジ構想

### 集落ぐるみでの自然体験学校づくり

筆者は、持続循環型で環境共生型の暮らしのための理念と手法を個々の都市住民も含めて、個々の生活者が獲得することの必要性を痛感し、10年来、パーマカルチャー（永続的農的生活術）の運動を進めている。その活動拠点を、神奈川県の間山地域の集落に求め、荒廃農地の再生、廃屋の改造等を介して、学びと体験の塾を始めている。

集落住民達の独自に、自然暮らしを希望して都市から移住してきた芸術家達と、環境共生及び伝統的な技能復活（炭窯づくり等）等を含めたエコロジカルな村づくりを始めている。その活動の一環として、近年廃校になった小学校を活用した「自然学校」運営を、集落で独自のNPO法人化を図り進める計画となっている。小学校の改築事業は、神奈川県、藤野町の行政の支援を得て進めてきている。将来的には、この「自然学校」が集落運営の拠点的機能を果たすことが期待されている。



写真 1 1 新住民の芸術家と地元住民の協働による集落野外コンサート風景



図 5 エコライフを学ぶ里山エコビレッジ構想

### まとめ / 地域環境資源を生かした環境共生型での農村環境整備の展望

地球環境的課題を積極的に解決していく方向を明確にした農村環境整備が求められており、その方向での計画のみならず、より地域を基盤とし、地域住民が主体となり、都市住民の協働したエコロジカルな農村環境づくりが求められている。以下の点がポイントとなる。

地球環境に配慮した環境配慮型の農村環境整備と景観整備

日本型・アジア型エコビレッジ

農村での生産と生活におけるローカルテクノロジーの再評価と活用

地域の人達が活力と意義をもって地域づくりのできる環境づくり

地産地消的な環境と経済の循環づくり  
環境の保全再生とあわせて、地域の経済的活性化、新しい起業、新しい環境ビジネス、新しいコミュニティビジネスの展開

下流の都市住民との協働による、農村環境の多面的保全・再生とそれを実現するための経済的連携システムの確立